

カガヤキ

No.53(2021.2.15 刊行)、広報委員会編集

県立図書館発行

禁複写転載©広報委員会

特別企画 リモート会議の推進について

リモート会議のメリットとデメリット

元原研職員

山本俊弘

ボランティア委員会委員長の桜井淳氏は、原発の安全システムを正確に熟知している、国内唯一無二の在野の専門家として、某原発立地県の専門委員会の委員を務めておられるとのことである。この委員会は、通常は、県庁会議室で開催されているが、令和3年になってからは、初めて、リモートで開催され、氏も水戸市内の事務所から何の支障もなく会合に参加できたとのことである。私自身、これまでリモート会合を利用した経験を踏まえて、リモート会合の推進の是非を論じてみたい。この論考が、ボランティア委員会の今後の進め方を考えるうえで参考になれば幸いである。

まず、リモート会合のメリット、デメリットを以下に列挙してみる。

メリット

1. 会合開催場所に行く必要がなく、自宅や勤務先の自身の座席などからでも参加できる。移動中でも参加が可能。私が経験した、とある国際的な会合では、欧州某国の参加者はバイクに乗りながら参加していたようである（法令上の問題については不明）。
2. 会議室に資料などを持ち込む必要がなく、オフィスや自身のパソコン内の資料の参照が可能である。会議中に、インターネットなどで必要な情報の調査・収集もできる。
3. 会合場所への往復の時間、交通費などが節約できる。拘束されるのは、会議中だけであるため、多忙な人でも参加しやすい。余った旅費等の予算は、他の目的に有効活用できる。年慶末に行われることの多い定足数の決まっている会議などでは、定足数に達せず、開催が困難になることが多々あるが、そのようなことが少なくなる。
4. 会議中に、食事など別のことができる。会議の前に慌てて食事を済ませたり、あるいは、会議中に空腹を我慢する必要がない。ビデオ機能を使わなければ、退屈な会議は居眠りをしていてもばれない。かかってきた電話への応答も可能である。
5. 会議中に内職が可能。このため、退屈な会議でも時間が有効に活用できる。
6. 複数のリモート会議に同時に参加することもできなくはない。なので、ダブルブッキングも可能。桜井氏によれば、前述の県の委員会でも、N先生は別の会合とかけ持ちで参加していたそうであ

る。リモート会議でなければ、両方、またはどちらかの会合は欠席していたはずである。

7. オンラインソフトに装備されているチャット機能などを使えば、別の人が発言中でも質問等が可能である。このため、「時間がなく発言できなかった」ということがない。また、電車の中などから参加していて、発声できない場合もチャット機能による発言が可能。
8. オンラインソフトに装備されている挙手機能を使えば、挙手している人の特定ができる。挙手の順番で指名するなどのルールを決めておけば、指名の公平性が確保できる。
9. 住民説明会などによく出没する不規則発言者は、回線を遮断することで排除できる。
10. 大声を張り上げ威圧的な発言で恫喝する参加者がいても、音量を小さくすることで、威圧の度合いを低減することができる。
11. 会議室の確保や、プレゼンテーションのための設備が不要。

デメリット

1. パソコン、オンライン回線、オンラインソフトなど、オンラインのための設備が必要。特に情報弱者の参加が困難。
2. 回線が繋がらないときは、まったく何もできない。そのために備えて、代替手段を用意しておく必要がある。
3. 会合前後の、参加者間の情報交換ができない。
4. 機密性を要する会合のセキュリティの確保が難しく、企業などでも、そのよう

な会合は、現在でも対面式で行っているとのことである。

5. 有料の会合やオンラインセミナーなどでは、料金を支払っていない人が脇で視聴しているおそれがある。桜井氏の事務所でも、今後は、オンラインでセミナーを開催する予定であると伺っているが、無断視聴者の排除は主催者にとって頭の痛い難題である。
6. 運輸、旅行業、ホテルなどの会議室提供ビジネスなどの衰退を招く。列車本数やフライト数が削減され、ホテルの部屋数も減少し、移動、宿泊に支障をきたすおそれがある。

以上、ざっと列挙してみたが、メリットのほうが大きいことは明らかである。多くの人が、リモート会合の利便性を認識するようになった今となつては、コロナ禍が収束しても、会合の形態は元には戻らず、リモート会合の流れはそのまま続くであろう。日本の生産性が先進国最低だといわれるが、その原因のひとつは多数開かれる会議がもたらす非効率性である。リモート会合の推進は、生産性を向上させる決定打となることは明らかである。

このように考えれば、生産性を高める最も有効な手段は、生産性を高めなければならない必要性あるいは需要を創出することである。必要は発明の母という。今回、コロナ禍が期せずして、生産性を向上させることに寄与したが、これも感染拡大防止という必要性がもたらしたものである。主要なオンラインソフトのほとんどがアメリカ資本であるのは、アメリカは国土が広いためリモート会合の必要性が存在したからだ

ろう。新自由主義的な発想では、生産性向上のために行政ができることは規制緩和だけ、ということになるのだろうが、リモート会合による生産性向上は、感染拡大防止という「規制強化」がもたらしたものである。このような新自由主義的な発想がいかにも誤りであるかを、今回のコロナ禍で強く実感した次第である。

ボランティア委員会は、高齢者の割合が高く、感染防止の観点からもオンラインでの会合の必要性が高まっている。会場場所への移動の必要がないことも高齢者にとって良いことであるが、往々にして、情報弱者の割合も高い。これをどう解決するか、委員長の手腕が問われるところである。

32年間の体験からリモート会議まで 商売道具の進化についての考察

広報グループ
桜井 淳

まえがき

私は、半世紀弱、書齋での仕事に携わった。と言っても、大きなことをしたわけではない。文献調査をし、思考にふけり、頭に描いた構想をそのまま文字に表現するだけである。分かりやすく言えば、学者の論文であり、作家の作品の部類である。

世の中、半世紀もすれば、あらゆる分野で大きな変化が生じる。これまでの地球文明を大きく分類すれば、第一革命としての「農業革命」、第二革命としての「産業革命」、そして、過去半世紀と言えば、第三

革命としての「情報革命」であり、これから第四革命を迎えようとしている。

大きく言えば、これから記す私の拙い経験は、「情報革命」の体験であり、第四革命の萌芽としてのリモートでの会議や業務の入口での初歩的な考察である。

原稿用紙 & エアメール時代

私が本格的に、原稿用紙に拙い文章を書き始めたのは、29歳であった。それは講談社からの依頼原稿であった。それから40歳すぎまでの約10年間、毎年、数編の月刊誌の特集原稿を執筆していた。年間数編と言うと、忘れた頃に、やっと、つぎの原稿依頼が入る程度で、原稿執筆だけでは、生活ができなかった。それでも、目標としていた著名な哲学者がいたため、かくありたいと心に決め、売れる文章修行に明け暮れた。

十分な文献調査を済ませておけば、ひとつの特集原稿の標準的な文量は、400字詰め原稿用紙に、25枚くらいであるため、一晩で書けた。翌朝、近くの郵便局から出版社に、郵送していた。それが日課になっていた。座り机での原稿執筆であったため、お尻が痛くなり、時には、腹ばいになり、執筆した時もあった。

海外とのやり取りは、国際電話かエアメールしかなく、実際に利用できたのは、欧米まで二週間もかかるが、エアメールだけだった。

ワープロ時代

私は、42歳の時、ある日突然、流行作家

並みの存在になっていた。そのきっかけは、あまり気乗りしなかった特集原稿を執筆したところ、大きく扱われ、社会で目立つ存在になったため、東大教授が、「朝日新聞」の「月間時評」欄で、私の作品を肯定的に取り上げたためであった。そのおかげで、年間100編の作品(ちょっとしたまとめから特集原稿までの広範囲の作品)を10年間、執筆していた。

世の中では、ワープロが利用されていたため、原稿執筆用として購入した。新幹線で移動中でも、ホテルでも、原稿が執筆できるように、あまり大きくなく、重くなく、取り扱いやすい機種を選択した。文字表示画面が大きくなかったため、読み返しての論理構成や修正作業に難があった。

ワープロでの原稿執筆には、時間がかかり、原稿用紙に書く時間に比べ、二倍の時間がかかった。原因は、考えながらの執筆であったため、タイピスト並みのキー操作ができなかったためである。消して、戻り、そんなことをくり返し、作品を完成していたが、ワープロになったことにより、文章を推敲することができた。執筆原稿は、すぐに、熱感紙にプリントアウトし、郵送していた。

ワープロを利用してから、編集者に感謝された。と言うのは、私が書いた原稿用紙の文字は、判別できない文字が多く(私が読み直しても読めない)、編集に苦労したが、ワープロできれいに整理され、プリントされた文章は、分かりやすく、判読できない文字は、なかったためである。ワープロ(2機種取り替え)での作業は10年弱であった。

パソコン & word & E-メール時代

私は、四半世紀前、50歳くらいから、社会に普及し始めていたパソコン(personal computer ; PC、Fujitsu社製)に乗り換えた。それから四半世紀間に、5機種、取り替えた。パソコンの処理速度と記憶容量は、急速に進化し、片手で持ち上げられる小さなパソコンの機能は、科学計算に利用していた日本でも代表的な研究機関が運用する大型コンピュータ並みの能力を有するようになった。当然、世界最先端の計算コードをインストールし、原子炉核熱流動計算や粒子シミュレーション計算が可能となった。

パソコンは、原稿執筆には、大変、便利であり、威力を発揮する。英文でも日本語でも、word機能を利用し、執筆、修正、編集、検索、スペルチェックなど、多くの機能が利用でき、文章の間違えを表示するAI(artificial intelligence ; AI)機能まで利用できる。

特集原稿の文量は、wordの標準書式で、7ページ分くらい、新聞文化欄の原稿は、1ページ分くらいである。著書の原稿の文量は、印刷時が標準的な250ページであれば、wordの標準書式で、120-150ページ分くらいである。

パソコンをウェブに接続(初期のころは電話線接続、最近ではWi-Fi(wireless fidelity)接続)すれば、ウェブ情報の検索、E-メールなど、さまざまな機能が利用でき、原稿執筆者にとってありがたい機能は、たとえ、著書一冊分の原稿でも、一度に、E-メール添付で、世界のどこにでも、瞬時に、送信できることである。著者校生

原稿も編集者からのEメール添付原稿として送られてくる。

パソコン時代になってから、原稿用紙時代やワープロ時代と異なり、原稿を郵送する手間が省けた。私は、パソコンに、プリンターを設置してない。すべての情報は、電子文書化し、プリントアウトする必要はないのである。時代は完全なペーパーレス化時代となった。

Eメール海外大学研究時代

パソコンさえあれば、新幹線の中でも、飛行機の中でも、国内外のホテルでも、Wi-Fi機能が利用できるため、世界のどこにいても仕事ができる。ボランティア通信紙の原稿もそのようにしてきた。

私の年間当たりのEメール送信と受信の件数は、各々、約1000件であり、決して多くはないが、質の高いやり取りを心がけている。Eメールやり取りの主な相手は、東大、京大、東工大、上智大、カリフォルニア大バークレー、スタンフォード大、MITなどの各研究者であり、その他、スイスの牧師、日本の教会の執事などである。

Eメールを効率的・効果的に利用すれば、客員研究員を兼職している国内外の研究機関や大学に出向かなくても事が済む。論文や重要な資料は、Eメール添付で送信し、その内容に対する質疑応答も、Eメールでできる。そのため、兼職先には、最低限、年に一回の訪問で事が足りる。しかし、Eメールでは、相手の顔の微妙な表情が読み取れないため、機微なやり取りができず、完璧な対応ができない。その問題点は、メリットとデメリットはあるものの、

リモート(remote)による会議や業務で部分的に解決できる。

これまでの32年間(42-74歳)に手にしたことは、「般若心経」に記された仏教の教えの本質的記述である「色即是空」の世界(欧米日の新聞や月刊誌に掲載された些細なまとめの数は、約3000件、単独著書数は、37冊、茨城県立図書館に採用され閲覧できる数は、25冊)である。「色即是空」(この世は、何もないような空虚な世界であることを心し、徳を積み、精進せよ)の本当の意味が良く分かる年齢に達した。

本稿の以上の事実関係の証拠については<https://ameblo.jp/stanford2008/>や茨城県立図書館HPの「詳細文献検索」欄による検索結果などに記されている。

リモート会議 & 業務時代

リモート会議や業務は、コロナ禍において、初めて発生した手段ではなく、形式はやや異なるものの、四半世紀も前に利用されていた。それはテレビ会議である。日本の一流企業では、日米間の打ち合わせには、まず、テレビ会議で話し合い、つぎに、米国に出張し、最後の微妙な問題の詰めと契約をする。国内の本社と支社の間でも利用されている。最近では、一流企業に限らず、広がり大きい。

日本では、2020年3月下旬から、コロナ禍に陥り、時間が経つにつれ、深刻化している。そのため、コロナ感染防止のため、休校になったり、出勤制限されたりしている。関係者は、その間、何もしていないわけではなく、ウェブを利用したリモートで授業や業務をこなしていた。

リモートでの会議や業務は、パソコンやスマホ(画面が小さいため不便)があれば、リモート専用アプリ(application program)の略で、代表的な物は、Zoom、Webex、Meet)を利用し、簡単に実施できる。ZoomとWebexでは、一度に、100人が参加でき、画面には、25人が表示できる。便利で効果的であるため、コロナ禍が収まって、利用者数は、拡大するだろう。やがて会議や業務の標準的手段となるに違いない。

茨城県立図書館ボランティアとしては、図書館・ボランティア全体やボランティア協議会やボランティアグループの各会議には、ぜひ、リモート会議の実施を推し進めていただきたい。

私は、最近(2020年12月25日13:30-16:00)、Zoomを利用し、静岡県防災・原子力学会議原子力分科会会合に参加したか、Zoom会合のメリットとデメリットについて、学ぶべきことの多い会合であった。

Zoom利用の必須操作項目

リモート会議は、「ゲスト」(招待客)として参加するだけならば、非常に簡単であり、パソコンさえ扱えれば、誰でもうまくできる。

手順としては、「ホスト」(主催者)が招待客に対し、メールにより、ミーティングIDとパスコードを知らせる。「ゲスト」は、それまで経験がなければ、ウェブから無料アプリを自身のパソコンにダウンロードし、そのアプリをダブルクリックして起動し、表示されるウィンドウの順序どお

り、入力すれば良い。

どのアプリを利用しても、手順と操作は、ほぼ同じであり、非常に簡単で、わずか三つの操作で接続できる。Zoomの場合、ウィンドウ表示「ミーティングに参加」をダブルクリックし、つぎのウィンドウ表示で、指定欄に、ミーティングIDと氏名を入力、つぎのウィンドウ表示で、指定欄に、パスコードを入力し、同ウィンドウの下部の「会議に参加する」をダブルクリックすれば、主催者が参加許可するので、接続できる。

表示画面に参加者の映像が表示される。画面の下端の左端から、音声オンオフ(途中、生活音などの雑音が入るのを防止するため、発言しない時には、オフにするのが常識)、映像オンオフ(ちょっと席を外す時などにはオフ)、右端に、退出オンオフ(会議内容によっては、途中退出したくなる場合があり、その時にはオン)の表示があり、上端の右端に、映像の表示法(全員か発言者のみか)の切り替えの指定がある。

「ホスト」を務めるには、やや作業を要し、まず、アカウント(ウェブを利用する権利)を作成しなければならない。手順は<https://zoomy.info/manuals/account/>が良い解説になる。まず、Zoom社のHPにアクセスし、ウィンドウ表示にしたがい、いくつかのウィンドウ表示にわたり、指定欄に、メールアドレスや氏名などを入力すれば良い。

「ホスト」の作業量は、少なくないが、通常の作業の範囲であり、煩わしさを感じるほどではない。

あとがき

私が生まれたころ、米国では、経済成長が始まり、豊かな生活の様子を世界に示していた。日本は、米国に遅れること約10年、米国の背中を見ながら、文化の輸入と日本的アレンジにより、経済成長を実現した。しかし、木に竹を接ぐ様な文化であったため、弊害と綻びが生じ、バブル経済崩壊後の最近の四半世紀においては、国際競争力が、世界の一流国(世界2位)から二流国(世界25位)に後退し、回復の兆しは見られない。

戦後、世界の一次エネルギー利用量は、指数関数的に増加し、なお、留まるところを知らない。しかし、その最大の弊害は、地球温暖化現象として顕在化した。そのため、二酸化炭素などの温暖化ガスを排出するこれまでの化石エネルギー(石炭、石油、天然ガスなど)の利用から、再生エネルギー(水力、風力、太陽光、地熱、潮流、バイオマスなど)の利用への政治的転換が図られている。と同時に、エネルギー利用量と利用法の質が問われている。

戦後半世紀は、表面的に見れば、第三革命としての石炭から石油の「エネルギー革命」のように見えるものの、それ以上の大きな社会的影響力を發揮したのがコンピュータやインターネットなどからなる「情報革命」であった。そのため、第三革命が、「エネルギー革命」ではなく、「情報革命」であることに、間違いない。私はその発展過程を体験した「団塊の世代」のひとりである。

本稿は、その「情報革命」の一端の探るに値しないほど些細な個人的な体験を記し

たメモである。

編集後記

茨城県立図書館ボランティアの多くのグループは、県立図書館の方針に従い、活動停止しているものの、デスクワークだけで活動の可能なグループは、細々と、活動を継続しており、そのうちのひとつが、広報グループです。コロナ禍のような憂鬱な社会では、なるべく明るく建設的な話題を提供するのが広報グループの役割と思い、無い知恵を絞り、編集作業を継続しています。

今回の特別企画は、「リモート会議の推進について」であり、企画段階では、茨城県立図書館と水戸キリストの教会の各担当者にも原稿依頼したものの、「十分な経験と実績をえていない」との理由により、実現できませんでした。各担当者の言葉は、おそらく、謙遜であろうから、つぎの特集の機会には、ぜひ、執筆していただきたい。

広報グループは、協力関係が崩れ、7年前から1年間、活動停止状態になり、引継ぎのひとりしか残らなかったものの、それから6年間かけ、活動再開と通信紙の質的向上に努めてきました。当初、3年間で建て直し、手を引くつもりでしたが、意外と時間がかかり、6年以上もかかってしまいました。私は、責任を果たしたため、2020年12月、次期の副委員長と委員長の候補者を探しましたが、残念ながら、引き受けていただけませんでした。候補者探し中。

桜井 淳